

戦後五十年の今

生野智子

半世紀前のあの暑い夏の日の正午、丁度その日は旧盆に当る八月十五日であった。

ラジオから流れた天皇陛下の「玉音」で大東亜戦争で日本が敗れたことを知り、その衝撃で家族の誰れもが言葉も出ず、熱く頬につたわる涙で長い長い暗い一日が終った。

僅（わず）か十歳で体験したこの敗戦の悲しみは、毎年盆の頃に鳴く悲しげな蟬の声を聞くと、私の脳裏に現実として蘇って来るのである……。

子どもも大人も身も心もボロボロになり苦悩と恐怖の地獄絵の様な毎

日であったあの三年八カ月は一体なんの為だったのか。それは十年にも二十年にも思える程の辛酸の連続であり、五十年経った今も消え去る事なく鮮明な映像として焼きついていく。

現在日本は表向きには一応平穏で豊かな日々であるかもしれぬが、あの戦争に依って愛する家族を失い、あの恐ろしい原爆での被爆者の永遠の苦しみ、また他国への戦争責任等々戦争の残した傷跡は永遠に引きずられていくのである。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発（ぼっぱつ）、その直後には

まるで戦争を讃えるかの様に旗行列や提灯行列が街中を賑わした。

翌年四月、私は小学校に入学したが、その年より従来の尋常小学校の名称が国民学校と改められ、それと同時に学校生活のカリキュラムの中には戦争中の国民であることの意識づけの為に各学科の中に戦争に関して讃える意味の内容を折り込む授業となっていた。

例えば、国語科では兵隊さんへの感謝の念を深める内容にし、特に作文はその類のテーマにさせ、図画や工作も兵隊、軍艦、飛行機等が描き出される様に、また書道はその頃盛んに暗記させられた。欲しがりません勝つ迄は、撃ちてしまん勝つ迄は、鬼畜米英

興国の荒廃この一戦にあり……等の標語。